

音楽文化シンポジウム

音楽と子ども達

- 日 時 平成 18 年 7 月 28 日 (金) 13:00~15:00
- 会 場 松下 IMP ビル 5 階 I 会議室
- パネリスト 頼近美津子 コンサートプランナー
古屋 光昭 NHK 青少年・子ども番組ディレクター
大里 安子 ヤマハ音楽教育システム本部講師
- ナビゲーター 竹澤 千絵 Sony Music Foundation (財団法人ソニー音楽芸術振興会)
プロデューサー

(竹澤) 加速する少子化傾向も手伝い、昨今、子どもの教育の在り方がメディアをにぎわせています。特に今、子どものエンタテインメントの分野も、ただ楽しいということから、「遊び+学ぶ=楽しい」という傾向が強くなっていると思います。

今日は、「音楽と子ども達」の現場で活躍されているパネリストの方々に、自己紹介を兼ね、まず時代の変化をどう肌で感じているかというお話から伺いたいと思います。

(古屋) 私は、大学で法律を勉強していたのですが、NHKに入局してひょんなことから幼児番組に携わることになりました。大学を出たの 23 歳で子ども番組を担当しろと言われて、最初はすごく抵抗があったのです。しかし「おかあさんといっしょ」のスタジオで「じゃじゃまる！ぴっころ！ぼろり！」と子ども達が呼んで、そのキャラクターが出てくると子ども達がまさに狂喜乱舞という感じで抱きついて喜んでいる様子を見て「すごい番組だな」と思いました。また実際に担当してみると、ドキュメンタリーなどと比べると、やりたいことが自由にできるという印象があって、どんどんとのめり込んでいきました。

ご質問の「時代の変化」についてですが、幼児番組の数は恐らくこの 10 年ぐらいでものすごく増えてきました。そして、「おかあさんといっしょ」のような総合百貨店タイプの番組だけではなく、「ハッチポッチステーション」「にほんごであそぼ」「からだであそぼ」「ひとりのできるもん!」「ピタゴラスイッチ」などのような、専門店タイプの番組が多くなったと思います。

(竹澤) NHKの番組の専門店化というのは、NHKから仕掛けたことなのでしょうか、それとも何か別の理由があったのですか。

(古屋) 「両方」とあえて言わせていただきます。私達は、皆さんの無意識のニーズをくみ上げて番組にしていくわけですが、直接手紙などで「こういう番組を作って」という要望が来るわけではないので、例えば、子どもの英語熱があるということを私達が肌で感じ取った中で増えてきたのだと思います。

一方、今、私が担当している「ピタゴラスイッチ」などは、社会のニーズがないところから、私達が新しいタイプの幼児番組として開発した番組です。「ピタゴラスイッチ」は、「考え方を育てる番組」と私達は言っています。例えば、水もお湯も氷も、存在としては同じものだけれども、状況や状態が変わると呼び名が変わります。あるいは、豆腐屋さんのラッパの音が聞こえれば、目で見ていなくても豆腐屋さんが近くにいることが分かります。同じように、救急車のサイレンなども音が印になっている、そういった「ある考え方」を番組の題材として取り上げています。

ただ、すべての番組に共通しているのは、何らかの音楽を使っていることです。音楽を使うと、非常に番組に子どもを惹きつけやすいのです。

(竹澤) そうですね。私は、未就学児童向けのクラシックコンサートの制作担当をしていますが、いい司会者がどんなに分かりやすい言葉で話していても、音楽が始まった瞬間に会場の空気が本当にがらっと変わります。

「にほんごであそぼ」という番組は、「日本のことば」を独特のリズムやメロディにして、新しい日本語の楽しみ方を提示したすばらしい番組だと思うのですが、なぜああいう番組ができたのですか。

(古屋) 「にほんごであそぼ」は、齋藤孝さんの『声に出して読みたい日本語』を読んだ担当者が、日本語をもう一度とらえなおした子ども向けの番組ができるのではないかと考えたのがきっかけです。その担当プロデューサーは、言葉がそもそも持っている力といますか、リズムに乗った言葉に注目しました。「じゅげむ」というのも普通の文章ではないですよね。一定のリズムでどんどん進んでいく、その言霊的な力に魅せられたとさえいえるのでしょうか。

(竹澤) 大里さんは、一言で言うと「ヤマハの熱血名物先生」とご紹介するのが、多分いちばんぴったりかと(笑)。大里さんは、時代の変化をどのようにお感じになられますか。

(大里) 今の子ども達は、小学生になって左脳を使う時期になると、昔の子ども達よりもへこたれるのが早いかな、根気強さが減ったかな、ちょっと表情が暗くなりやすくなったかな、という印象を受けることがあります。ですが、小さいうちは昔の子どもと全く変わらないと思いますよ。ちょっとビデオをごらんください。

ビデオ上映

これは12年前です。このあと私は、「よく指揮を見なさい」と言うのですが、誰も見ません(笑)。でも、音にすると、不思議なもので整理されて聞こえてきてしまうのです。一人ずつ聞くとさんざんなものですが(笑)。

これが今の子ども達です。2歳のクラスで、途中で止まるのですが、やはりだんだん合うようになってきます。音が規則的ではないので、子ども達がだんだん集中してくるのです。小さければ小さいほど、子ども達の感性というか、わくわくと音に反応する力は、きっと今も昔も変わらない。そういう力を30歳、40歳、いくつになっても持ち続けてほしいと願いながら育てていく事が私の仕事です。

(竹澤) もう少し上の年齢になるとどうなのでしょう。

(大里) 子ども達が左脳を使う時期になると、何か昔とは変わってきていると感じることがあります。それは、要は少子化など、子どもを取り巻く環境が変わってきていることで、大人が子どもに集中しやすくなっているのかしらと思っています。子ども達は、本当は面白いことにいっぱい気がついたりしようとしているのだけれども、塾の勉強を先にしないといけないし、きれいな絵をほわんと見ている、「ほら、早くしなきゃ」という言葉がお母さんから出てくる。実は、私も失敗した一人のお母さんとしてお話しているのですが、その私が息子を育てた時期よりも、今のほうがもっと子ども達が忙しくなっていると思います。おけいこ事を幾つしているのかを聞くと、大体みんな5本ぐらい指を折りますから。失敗を恐れる子が増えているのは、忙しい中、答えをすぐに出さなくてはならない状況にいること等も一つの原因になっているのだと思います。

音楽には不思議な力があって、音楽そのものから子ども達が計り知れない影響を受けていきますから、今の子ども達こそ、豊かな経験をさせたいと思っています。身の周りの自然や、環境までも気持ちもちが広がるように……。

(竹澤) 親も含めて、子どもを取り巻く環境が変わってきているということですね。私も未就学児童向けのコンサートのたびに、保護者の方の層や嗜好、あるいはマナーについての基準が、ものすごく多様化していることを感じるのですが、大里さんの現場ではそのようなことはないですか。

(大里) やはり職業を持った方や、特に私のクラスは音楽を経験している方がとても多くいらっしゃいます。反面、親の身なり一つにしても、やはり開放的になっていますよね。特に初めて2歳の子ども達をお預かりする時に体験教室に来られるお母さんは本当に様々で、ちょっとこちらが引きたくなるような方もいらっしゃいます(笑)。ただ、子ども達に「おててをひざにおいて、足をまっすぐにして」と言うと、後ろのお母さんもそうして下さる(笑)。素直なのです。だから見た目では絶対判断できないのが今の時代だだと思います。逆に言うと、お母様達が子どもを思う気持ちも、音楽を楽しむ気持ちも、変わっていないのだろうと思います。

(竹澤) 頼近さんは、NHKご出身で古屋さんの大先輩でもあります。今は、コンサートプランナーとして全国を駆け回って

らっしゃいます。ブラウン管から出て生の現場に軸足を移された背景を教えてください。

(頼近) 私の場合は、成り行きです(笑)。私は、NHKに3年しかいなかったのですが、その間にNHKのFM放送でクラシック番組の枠づけ(曲の紹介)を担当することも多くありました。ですから、前枠をつけたあと、音楽をずっとスタジオで聞いているうちに、勉強も一緒にできていたのです。また、私は、ちょうどヤマハが音楽教室を作り始めた時代が3歳くらい、そして広島に桐朋の「子供のための音楽教室」が作られ、そこに一期生で入り、斎藤秀雄先生についてチェロを勉強するという幸運にも恵まれました。でも、音楽とかかわっていく生活をするなど夢にも思うことなく、NHKからフジテレビに移って仕事をしていました。暫くして、たまたまある会合で斎藤秀雄先生のお弟子さんの小澤征爾さんからコンサートに誘っていただいたのが、大きな転機になりました。

そのコンサートは、桐朋学園大学の学生さん達14~15人の弦楽アンサンブル、トランペットの田宮先生(前学長)や指揮の小澤征爾さん、そしてチェリストにムスティスラフ・ロストロポーヴィチさんを迎えたものでした。ソビエトを追放された、世界一の演奏家のお一人です。長野県の山奥の、道に街灯もないような村で1日2回演奏会を開き、1週間いろいろな所を転々と回るといいうものでした。どこで演奏したかという、川原(笑)、お寺(笑)、小学校の体育館。大概が神社の境内などで、お客様にもあらかじめチケットやコンサート情報などは何も流していないわけです。

そして、田宮さんがトランペットを吹いて、田んぼで働いている人達に「音楽会をやるから来ませんか」と客集めをして回る。それで「何か変わったことをやるらしい」とおじさん達が畑仕事そのままの格好で腰にタオルをぶら下げてガヤガヤと集まってきて、音楽会が始まる。これは1990年ぐらいの話なので、まだ小澤さんのお名前もご存じない方が多かったです。そこで突然何か始まって「この人達は、誰なんだろうね」というおじさんとおばさん達の声が聞こえるのです。それで、ロストロポーヴィチさんをソリストにして、ヴィヴァルディとハイドンのチェロ協奏曲を演奏するのですが、ステージではないので、一曲終わって次の曲までの間に引込み場所もない。そのままそこに座っている。その村の人達は演奏者の名前も演奏曲も知らないし、どこで拍手するかも分からないという状態だったのです。私は、それを拝見していて余りにもつたいなくて、いつの間にかマイクを握って説明を始めていました。

その面白いコンサートツアーは、キャラバンコンサートと名前がつけられ、今も続いているそうです。そのユニークさは、入場料を取らない代わりに、その村で学生を一軒に一人泊めてもらって食べさせてもらう。これは、若い音楽家達に自分がどういふ方々にどういふふうに分かるのかということを考える機会を早く持ってほしいという意図で企画されたものだそうです。そこでマイクを握っているうちに、小さい頃に音楽教室で教えてもらっていた経験や、NHKでの仕事を通して聴くポイントのようなものが少しずつ分かるようになった経験が、思い出されてきたのです。絵も同じかもしれませんが、鑑賞のポイントを一つ教えてもらうだけで楽しくなるということが、音楽にもきっとあると思うのです。その気持ちがだんだん高じてきて、いつの間にかコンサート会場でお話するようになったということです。

(竹澤) 頼近さんのお話は、聞いていてこう、言葉に力を感じます。頼近さんは、やはり自分の体験を伝えたいという気持ちが強いから、言葉に力があるのだと思います。では、今日のテーマ「音楽と子ども達」に話を戻して、次に、おさん方が普段お仕事をされていて、気をつけているポイントなどはあるのでしょうか？

(古屋) 私は、幼児番組をやる前に青年向けのももやっていたのですが、その時に番組作りのポイントとして教えられたのが、5分に1回見せ場を作れということでした。ただ、幼児の場合は3分に1回惹きつけていないと飽きられてしまうので、幼児番組では非常に短いコーナーが幾つも塊になっています。これを我々はセグメントと言うのですが、一つのセグメントを3~5分をめぐりにして作っています。

また、演出的なこととしては、1つ1つのセグメントの狙いをはっきりさせています。例えば、「おかあさんといっしょ」で「月の歌」を作る時に、今回のテーマは天気がよくて気持ちがいいという晴ればれとした気持ちを歌にしようとか、友達と一緒にいると気持ちがいいな、などとテーマを決めて、歌詞を作ることを心掛けています。

私は、子どもの歌だって、恋愛の歌は成立すると思っています。実際に「銀ちゃんのラブレター」という恋心を歌った歌の詞を、俵万智さんに書いていただきました。「ぎんのじょうくんから ユリちゃんにおてがみ でも ぎんちゃん は じがかけません だから はるには ふとうに さくらの はなを いれました」。同じように「なつには ひろったかいを いれました」「あきには あかい おちばを いれました」という歌詞です。私は、あるテーマをどうやって子どもに分かる表現に落とし込むかというところが、私達に求められているところだと思っています。その素材集めに関しては、ふっと日常で思いついたり、普段スルーしているものがそ

ういう意識でいるとちゃんと自分のフィルターに引っかかってくるとしか言いようがありません。ノウハウはないですね。

(大里) 私達が子ども達に求めるものは、自分で感じたものをどんなレベルであれ、音で表現してもらいたいということです。またビデオを見てください。

ビデオ上映

5歳の子です。レッスンではメロディにハーモニーをつける練習をして、みんな同じぐらいの曲が書けるようになっていくのです。でも、あや子ちゃんはこの時期に心を込めるという才能が表に出てきたのでしょうか。人よりもうまく弾くというよりも、心を込めて自分の音を出しているような気がします。

(頼近) 私が勉強したころは、最初から音符になった楽譜を渡されていました。それを指で音にして追っかけて、そこに表情をつけなさいと言われていたのです。先生のところでは、表現したいものを先に探して、その表情をどう音にするかということですか。

(大里) ポイントを突いた素晴らしいことを聞いてくださいました。次のビデオをご覧ください(笑)。

ビデオ上映

これは2歳の始まったばかりのクラスです。子ども達にピアノを聴いてもらっています。かなり動いてちょっとくたびれて、ママのひざに行きたくなった頃合を見計らって聴かせるのです。元気な時にはじつとしませんから、聴かせることはできません(笑)。ここで音の温かさを知り、お母さんと同調することを経験して、いわゆる心地よさを味わいます。でも、子ども達はこれで済まないのです。心地よさの後に発散しないとお教室が楽しくならない。そこで、今度はピアノの楽しそうな音を聴かせて、本当に揺さぶるわけです。音楽に乗るという経験をするわけですね。まだ、日本語もまともに通じていないのに、音には反応するのです。音楽の素晴らしさだと思います。そして、次の段階で子ども達は鍵盤でいろいろ遊ぶのです。ドレミを教える前に、腕を使って鍵盤をたたいたり、グーやチョキで黒い鍵盤を押さえたりというように、鍵盤と遊んでいくわけです。

次の年です。象さんを今から経験させようとしています。子どもは小さければ小さいほど細かい体の筋肉の動きができません。ですから、まず大きな筋肉を使って、腕で象さんのお鼻をまねています。もうその気になってくれていますね。

でも、この時間になるとどうしても眠くなる子が何人かいるのです。やはり子どもというのは、頭を使うこととか、集中することになると本能的に目をつぶるのです。でも、このお母さんが素敵なのです。動じずに手をたたいています。すると、子どもがゆっくり起きてくるのです。ここが素敵なの所なのです。ともかく、子どもを信じてあげること、子どもは絶対に音楽を聴いているのです。脳みそが言うことを聞かないだけなのです。これを見ると、待ってあげようという気持ちを忘れずにと 생각합니다。

ここで表現をした子ども達が、次の年になりますと、もう指先の動きが出てきます。それと、この時期は聴覚をしっかり使われます。演奏を始めたなら絶対に止まらない。ここは、私も踏ん張りどころです。1回止まったらダメなのです、集中力が保たれない。

こうやって遊んでいって、挙句にその経験を基に自分の気持ちを込めてちょっとアレンジしてみようと言います。この10か月後ぐらいには、「カッコウ」という曲を自分の気持ちでアレンジして楽譜に書いて、それを演奏してくれるようになります。女の子の方がやはり器用です。男の子と女の子の違いは指先にとてもよく表れますから、この時期に弾けなくても歌えていれば力になってきます。男の子はハチャメチャですが、逆に緻密さはあると思います。また、男の子はやりたいことを見つけると一生懸命練習します。

(頼近) このあたりで多くの男の子、お子さん達が、指のけいこでお母さんや先生にガミガミ言われて挫折するのです。そして、嫌いになって二度と鍵盤を見たくないと言うようになるのですが、そうならないコツというのは何かあるのですか？

(大里) それは、先程の寝た子を起こすお母さんです。あのように、ともかく音が鳴っていて、クラスみんなと何かをやっていけば、身につく時期なのです。4歳、5歳はその場で心ときめかせて歌うか聴くかをすれば、その時にできなくても、後ではちゃんと自分の音を表現できる子になります。だから、私は、こういうクラス(グループ)レッスンをとてもいいことだと思っ

います。練習してきなさいという言い方をするよりも、みんなと弾きたいから練習するとか、練習してこなくとも一生懸命その場で参加していこうという気持ちが、レッスンモードに入ればいいのです。生理学的にも耳と感覚がぐんと伸びる時期ですから、この時期はともかくいろいろな経験をさせるのがいちばんです。だから、お母さん達には、にこやかに一緒に楽しんでくださいとお願いしています。

指の筋肉は、小学校の2年生の始まりぐらいにしっかりしてきますから、そこからはびしばしですね。私も鬼になってまいります。何かしたいという気持ちを持ってくれること、やった結果がそこで出ることによって自分の中にわいてくる充実感や到達感のようなものを子ども達が受け止めると変わってくる気がします。

(竹澤) うーん、もはや、音楽の先生という枠の中のお話ではないですね。2歳、3歳、さらには、月単位での子どもの心理や体の成長を踏まえて、人格形成をしているような感じですね。

(頼近) そう、音楽というのは別に特殊なものではなくて、人格の中の一つ、楽しみたいという欲求の一つなのではないでしょうか。食べることも楽しみではないですか。音に対する欲というのも、やはり人間にはあると思います。それをたまたま教えてあげているのが音楽教育かなと。

(大里) そうですね。季節感や色、そして、大きいとか小さいとか、様々なものも音楽から感じとれるよう一緒に聞き方の経験をしていきます。たとえば、3歳クラスでは「今日は、お化け屋敷に行ってみない？」と声をかけ、不思議な、そしてちょっと不気味な曲を聞いていきます。曲の流れにそってお化け屋敷を子ども達と探検します。最後に「わっ」と言うと、かなりインパクトがあり、それはもう大変な恐怖の瞬間が出来上がります。日頃聞く、楽しい、美しい音楽と全く違う受け止め方をクラス全体で共感します。音楽からくるイメージの世界がまた広がります。この年齢ですでに五感を使ってキャッチしています。次のレッスンからこの曲を展開するには一工夫しないとレッスン出来なくなる程です。不気味な音に敏感になっている子ども達の気持ちを受け止めながら、現実とファンタジーの違いを感じさせていきます。その後には、楽しいことをいっぱいして「次のレッスンに必ず来てよ」とその日のレッスンを終わります。音楽から来る計り知れないイメージ、音の力はすごいですよね。

(古屋) 私は、音楽ではなく、音そのものをすごく重要視しています。例えば、「ピタゴラスイッチ」の中で、「10本アニメ」というアニメーションのコーナーがあります。10本の棒が組み合わさっていろいろな物の形になりストーリーが進んでいく、というアニメなのですが、その棒が動いていくところにどういった音をつけるかによって、例えば、「コン、コン」という音だったらその棒はすごく硬いものに見えるし、くぐもった音がすれば軟らかい棒に感じられるのです。つまり、音はものすごく映像を規定しているのです。

(頼近) ちょっと話が違うかもしれませんが、人間の話し言葉を聞いていても、母音の音色の違いって大きいんですよ。例えば、人それぞれに、または場合に応じて「あ」と言う時の口の大きさが違うのです。「あー」と言うと色彩的にも明るい音ですが、少し小さめの「あ」にすると色的にもくぐもってくる。

楽器も人間が出す音も、みんな音色が明らかに違うのです。だから豊かな組み合わせが何とおりでできる。だからこそ、音楽は色のパレットが多くて、表現できる可能性が大きいような気がするのです。ピアノだけは、すごくまい人がドの音をたたいても、猫がたまたま指を引っかけても、ドはやはりドですので、他の楽器や音より、違いは難しいと思いますが。勿論本当は、ピアノの音色は微妙に違うのですけど…。

(竹澤) 頼近さんはコンサートでお子さんに話す時、言葉の使い方や話し方を変えたりなさるのですか。

(頼近) 小学生なら基本的には変えません。変えないどころか本当にすごい勢いで話します。私は、これが言いたい、これが伝えたい、だから聞いてよと。これは大人の方に対しても小学生でも同じです。

私が二人の息子達を育ててきて思うのは、子どもは言っている内容が言葉として理解できなくても、勢いは理解できる。伝えたいという気持ちは伝わるということです。音楽というのは、基本的には音波ですから波です。波をボディソニックで感じるか感じないかという部分もありますよね。それと同じで、説明していることを逐一は分からなくていい。けれども、「ここはね」というその気持ちが、こちらからこちらへ向かっているのだということに、まず気がついてもらいたい、いつも思っています。です

から、難しい四文字熟語は使いませんが、言葉遣いはほとんど変えません。

(竹澤) なるほど。それでは最後に「音楽と子ども達」の現場において、ご自身が目指していることなどありましたら、ぜひお一人ずつお話をお願いします。

(古屋) 私は、どうしてもプロデューサーという立場になることが多いのですが、最近、教育テレビが話題になっているのも、割と世の中で旬といわれている人を取り上げることが多くなったからだろうと思っています。例えば、「にほんごであそぼ」には野村萬斎さんや小錦さんが出ていますし、「からだであそぼ」にはケイン・コスギさんが出ています。私達としては、別に流行を追いかけているわけではなくて、この人と一緒に番組を作りたいと思わせる人が、結果的に「旬の人」になっているということなのです。

また、クラシック音楽を取り上げている番組として「ゆうがたクインテット」という番組があります。なぜか子どもとお年寄りに非常に人気のある番組で、パペットが非常に達者な演奏をしています。その人形の手を動かしているのはクラシックを学んでいる本職の学生さん達で、表情は人形芝居のプロのかたが作っています。要は、3人がかりで動かしているのです。ぜひごらんになってみてください。

私は、子どものもので絶対的にこれが正しいというものはありません。最終的な判断基準は、結局は作り手である自分が面白いと思えるか否かということに置いています。

ビデオ上映

(大里) このビデオは、一人の寡黙なお嬢さんがオーケストラの前で即興演奏をしている場面です。言葉で自分の気持ちを表現することが苦手なお嬢さんでしたが、せめて自分の気持ちを音で表現してほしいと私が彼女に願った気持ちが、この舞台の上の力強い演奏となりました。今は、作曲家として、バリでも仕事をしています。

また、7年前「音楽は子どもに何を与えられるか」という本をヤマハ音楽振興会から出版する時に、先程、即興演奏した人と同じクラスにいて、現在ピアニストになってアメリカで仕事をしている相沢吏江子さんから、ちょっと素敵な文章をプレゼントしてもらいました。「音楽は、あくまで芸術であり、学問ではありません。音楽は、人間味があって心を豊かにしてくれるものです。ですから作曲家、演奏家、指導者、生徒、聴衆、皆が常に音楽の真の美しさと喜びを大切にしながら謙虚な気持ちで音楽に接したいものです」。コレを読み、私はとても胸一杯になりました。

(頼近) 私は、聴衆の方に「クラシック音楽って敷居の高いものだと思っていたのだけど、1回足を運んだら、こんな楽しくて、こんなふうに聴けばいいのか」という経験をしてもらえて、そして、今度はお友達を誘って行ってみようかなという気持ちになっていただければと…。そういう素地作りをしているという気がしています。

質疑応答

(竹澤) 休憩時間中に会場から質問を頂いています。音楽ジャーナリストの方々のご質問で、公の学校の音楽教育の意義と必要性に関してご意見をいただきたい。

(頼近) 私は、あってもいいと思いますが、点数がつかなければもっといいと思います。私は、作曲家の名前など全然覚えられませんでした。うちの息子達は、インターナショナルの学校に通ったのですが、授業に出なかったら fail、授業に出れば pass、それだけでした。ですから、子ども達は音楽が好きです。私は、音楽は学科ではないと思うのです。音を楽しむことになぜ点数をつけるのでしょうか。

(古屋) 全く同感です。本当に音を楽しむことができれば、それが授業としてあるのはいいのではないかと思います。要は評価のしかたですね。

ただ、私は皆さんと違って、きちんとした音楽教育を受けていないので、楽譜もちゃんと読めません。だから、「こういう感じで歌を歌って欲しい」と思っても、その感じをなかなかうまく相手に伝えることが出来ない、例えばスラーで歌って、と言えば歌手

の人にすぐ伝わるのが、音楽用語を知らないためになかなか伝えられない。だから世界共通の言語としての楽譜や音楽用語は、きちんと教えてくれるといいと思います。

(大里) 最近、私がとても感動したのは、12～13歳のころにヘンデルのメサイヤを歌った関西学院のクラブのOBの方々が、皆さんほとんど暗譜で歌われるのを聴いた時です。私もクリスチャンなのですが、イエス様を信じる気持ちからか、メロディの美しさからか、最後のフーガに差しかかった時には、後光が差しているのを感じました。いちばん多感な時期にそういう経験をされたというのは素晴らしいことです。そういうことが今、日本の学校教育には欠けていると思います。

(竹澤) 私は最近、中学生のクラス全員が屋外で、大声で合唱コンクールの練習をしているのを見かけました。曲は、ゴスペル。すごくみんな楽しそうで、本当に自分達が歌いたいから歌っているのだと思いました。先生は、見当たりませんでした。私は、先生が選んだ合唱曲を歌わされた思い出しかないの、今の義務教育の音楽の現場も変わってきているのではないかと思います。今後、そのような立場におられる方のお話もぜひ伺ってみたいものです。

(Q) 大手電機メーカーの通信技術者です。うちの会社では、大画面ディスプレイ、光通信、特別光プレミアムなどのツールを開発していますが、そのうちで子どもにとって悪いメディアはありますか。もう一つ、私もクラシックをいろいろなオーケストラで聞くのですが、ボストン交響楽団は下手くそだなと思うし、大阪フィルで聴いた「愛の挨拶」はすごく感動的でした。やはり本当の音楽を聞かせることは重要だと思うのですが、例えばウィーンフィルの日本公演などは本当にいいのでしょうか。

(竹澤) 私は、いい悪いはメディアのツールやメディアそのものではなく、メディアの使い方の問題ではないかと思いますが、パネリストの方々はいかがでしょう。

(古屋) 同感です。私達も、テレビを子どもだけで長時間見せっぱなしはよくないと思っています。特に幼児には、なるべくお母さんなりお父さんなりと一緒にいて、コミュニケーションを取りながら見てくださると、いろいろな機会です。

以前、「ハッチポッチステーション」がお母さん方に非常に好評で、お母さんが楽しそうにテレビを見ている様子を子どもが見て、それで子どもも嬉しそうに一緒にテレビを見ているという話をよく聞きました。ですから、本当にメディアは使いようで、いい悪いという線引きは、非常に難しいと思います。

(頼近) 本物の音楽とは、ということ具体的にボストン交響楽団とウィーンフィルの名前が出ましたが…。上手いか下手かは別にして、名門オケということで解釈させていただくと、ベルリンフィルとラトルがサントリーホールで演奏したマーラーの5番は、指揮者とオーケストラ、そして聴衆が本当に一体になって、凄く緊張感のあるppを聴くことができました。音楽会の出来・不出来の一端は聴衆が担っているものだと、改めて感じたコンサートでした。

(大里) 私達は、もっと現実的で、子ども達に「一緒に聞きにいこう」という時には、バイオリンの音は、まず腕が上がって、次に鳴る瞬間を見せて音のイメージを捉えさせ、そして、終わって手が下りて顔を上げるまでが音だということを感じさせます。一人ずつに想像力をかき立てる何かを用意するのが大人の仕事かなと思っています。

(竹澤) ありがとうございます。